集英社版
世界文学全集

72

魯迅 狂人日记 啊Q
巴金 寒夜

訳＝
駒田信二
立間祥介

集英社

© 1978 Shueisha Printed in Japan

集英社版　世界文学全集　72

狂人日記／阿Q正伝／寒い夜　他

一九七八年四月二十五日　印刷
一九七八年五月二十五日　発行

訳　者　駒田信二／立間祥介
編　集　株式会社　綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一

発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています

0397-168072-3041

目次

魯迅

狂人日記　駒田信二訳　5
孔乙己　駒田信二訳　15
薬　駒田信二訳　20
故郷　駒田信二訳　28
阿Q正伝　駒田信二訳　37
祝福　駒田信二訳　73
藤野先生　駒田信二訳　89
野草　駒田信二訳　95

巴金

寒い夜　立間祥介訳　135

後記・注解　359
解説　駒田信二／立間祥介　361
年譜　379

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

狂人日記
孔乙己
薬
故郷
阿Q正伝
祝福
藤野先生
野草

狂人日記

某君兄弟は、いまその名は秘するが、ともに余の往年の中学時代の友人である。別れてより年久しく、いつしか音信も絶えていた。先日たまたまそのうちの一人が大病をしたときき、郷里へ帰るに際し、まわり道をして訪ねていったところ、一人だけにしか会えなかった。病気になったのはその弟のほうだという。遠路見舞いに来てくれてありがとう、だが、すでに全快し、某地へ行って任官を待っている。そして笑いながら、日記二冊を差し出していうには、これを見ればかつての病状がわかる、旧友の君にならあげてもよかろうと。持ち帰って一読したところ、病っていたのは「被害妄想」のたぐいらしかった。言葉はすこぶる錯雑していて秩序なく、荒唐無稽の語も多い。日付もしるされていないが、墨色や字体が一様でないので、一時に書かれたものではないことがわかる。なかにはほぼ筋道のとおったところもあるので、いま抄録して一篇とし、医家の研究に供しよう。文中、言葉の誤りは、一字も訂正しない。ただ人名はみな村人で、世間に名を知られることなく、重大なことではないけれども、ことごとく変えた。書名については、本人が全快後につけたものゆえ、あらためなかった。七年四月二日しるす。

1

今夜は、いい月だ。

わたしが月を見なくなってから、もう三十年あまりになる。今日は見たので、気分がとてもさわやかだ。それで、これまでの三十年あまりというものは、まったく気がくるっていたのだということがわかった。しかし十分用心しなければならぬ。そうでなければ、あの趙家の犬が、なぜわたしをじろじろ見るのかわからぬ。

わたしがこわがるのは当然なのだ。

2

今日はまったく月がなく、わたしは、これはまずいなと思った。朝、用心して家を出ると、趙貴翁の眼つきがおかしい。わたしをこわがっているようでもあり、わたしをやっつけようと考えているようでもある。ほかにも七、八人

の者が、耳に口をつけあってわたしのことを何のかのといいながら、やはりわたしに見られるのをこわがっているのだ。道でゆきあう者は、みんなそんなふうだった。そのなかでいちばんたちのわるいやつが、大口をあけて、わたしに向かって笑いかけやがった。わたしは頭のてっぺんから足のつまさきまでゾッとした。やつらの手筈は、すっかりとのっていることがわかった。

だがわたしは、いつものように歩いていった。と、前方に子供たちがいて、やはりわたしのことを何のかのといあっている。眼つきは趙貴翁と同じだし、顔色もみな青黒い。わたしは、子供たちとのあいだに何の怨みがあって、彼らまでこんなふうなのかと思う。我慢ができなくなって大声で「わけをいえ！」というと、彼らはさっと逃げていった。

わたしは思った。わたしと趙貴翁のあいだに何の怨みがあるのか、路上の人たちとのあいだにも何の怨みがあるのか。ただ、二十年前に古久先生の古い出納簿を踏んづけたところ、古久先生がずいぶん機嫌をわるくしたことがあった。趙貴翁は古久先生と知りあいではないが、きっとそのうわさをきいて義憤を感じたのだろう。そして路上の人々をさそい込んでわたしに対して怨みを持たせたのだろう。だが、子供たちはどうだ。あのときは彼らはまだ生まれてもいなかったのに、なぜ今日も、わたしをこわがるような、わたしをやっつけようと考えているような、おかしな眼つきでにらむのだろう。これはほんとうにおそろしいことだ、わけのわからない、そして、かなしいことだ。

わかった。これは彼らの親たちが教えたのだ。

3

夜、どうしても眠れない。物事は研究してみなければ、わかるものではない。

彼らは――県知事に枷をはめられたことのある者もおれば、旦那衆に平手打ちを食わされたことのある者もあり、役人に女房を寝取られた者もおれば、親が借金取りにせめ殺された者もいるが、彼らはそのときだって、昨日のようなあんなこわそうな顔つきはしなかったし、あんな凶悪な顔つきはしなかったのだ。

もっとも奇怪なのは昨日道で出会ったあの女で、自分の息子をなぐって、口では「くそ親父！　お前さんに咬みついてやらんことには気がおさまらんよ」といいながら、その眼はわたしを見つめているのだ。わたしはびっくりし、すっかりうろたえてしまった。あの青い顔をして歯をむきだした連中が、どっと笑いだした。陳老五がいそいでやってきて、無理やりわたしを家の中へひきずりもどした。

家へひきずりもどしておきながら、家の者はみなわたし

を知らないようなふりをしているのである。彼らの眼つきも、ほかの連中とまったく同じなのだ。書斎へはいったら、すぐ戸に鍵をかけられた。まるで鶏か家鴨をとじこめるように。この事件で、わたしはますますわけがわからなくなった。

数日前、狼子村の小作人が凶作を訴えに来て、兄に話していた。彼らの村の極悪人がみんなになぐり殺されたが、数人の者がその男の心臓と肝臓をえぐり出し、油でいためて食った。そうすると肝っ玉が大きくなるという。わたしが口をはさんだら、小作人も兄もじろじろとわたしを見た。今日やっとわかったのだが、彼らの眼つきは外のあの連中とまったく同じだ。

思い出すと、頭のてっぺんから足のつまさきまでゾッとする。

彼らは人間を食うのだ。そうすれば、わたしを食わないとはかぎらない。

そうだ、あの女が「咬みついてやる」といった言葉も、青い顔をして歯をむきだした連中の笑いも、先日の小作人の話も、明らかに暗号なのだ。彼らのいうことはみんな毒であり、笑いはみんな刀であり、彼らの歯はみんな真っ白に並んでいるが、あれは人間を食う道具なのだということがわかった。

自分自身をふりかえってみれば、わたしは悪人ではないが、古家の帳簿を踏んづけてからは、そうもいえなくなった。彼らには別な考えがあるらしいのだが、わたしには皆目見当がつかない。しかも彼らはいったん仲違いをすれば、すぐ人を悪人呼ばわりするのだから。わたしはいまでも覚えているが、兄がわたしに論文の書き方を教えてくれたとき、どんな善人だろうと少しけなせば、彼は圏点をつけてくれたし、悪人を少し弁護すれば、彼は「天を翻す妙手にして、衆と同じからず」とほめた。わたしには、彼らの考えが結局はどういうことなのか、まるでわからない。いわんや、いまは人を食おうとしているのだから。

物事は研究してみなければ、わかるものではない。昔から人間はいつも人間を食っていたということは、わたしも覚えてはいる。だが、はっきりとはわからない。わたしは歴史をひもといて調べてみたが、その歴史には年代がなく、くねくねとどのページにもみな「仁義道徳」という字が書いてあるのである。わたしはどのみち眠れないので、夜中まで丹念に読んでみたところ、字と字のあいだから字が見えてきた。本にはびっしりと「食人」という二字が書かれているのだ！

本にはこんなにたくさん字が書いてあり、小作人はあんなにいろいろと話した。それなのにみんなにやにや笑いながらあやしげな眼つきでわたしをにらんでいる。

わたしも人間である。彼らはわたしを食おうと思ってい

るのだ！

4

朝、わたしはしばらく静かに坐っていた。陳老五が飯をはこんできた。一皿の野菜料理、一皿の蒸魚料理。その魚の目玉は、白くて硬く、口を大きくあけていて、あの人間を食おうと思っている人間どもとそっくりである。二口、三口食ってみたが、ぬるぬるしていて魚なのか人間なのかわからず、腹の中のものもろとも、すっかり吐き出してしまった。

わたしはいった。「老五、兄貴にいってくれ。くさくさしてならんから、庭を歩いてみたいとな」老五は答えずに、行ってしまったが、しばらくすると、やってきて戸をあけた。

わたしは動かずにいて、彼らがわたしをどのように処置するかを研究した。彼らがわたしを釈放しないだろうということはわかっていた。果してそうだった！　兄は一人の老人をつれて、ゆっくりやってきた。彼は凶悪な眼つきをしていたが、それをわたしに見破られないように、ひたすらうつむきながら、眼鏡の端からこっそりとわたしを見ている。兄がいった。「今日は具合がよさそうだね」「はい」とわたしがいうと、兄は「今日は何先生に来ていただいて、お前をみていただくことにしたよ」といった。わたしは「いいとも」といったが、じつはこの老人が首斬り役人の変装であることぐらいはちゃんと知っているのだ！　脈をみるという名目で、肥り具合をはかるにきまっている。その功労によって、自分も一切れの肉を分けてもらって食おうというのだ。だがわたしはおそれはしない。人間こそ食わないが、肝っ玉は彼らより大きいのだ。両方の拳をつき出して、彼がどのように手を下すかを見ていた。老人は坐り、眼をつむり、しばらく手でなでさすり、しばらくぼんやりしていたが、やがてその薄気味わるい眼を見開いていった。「くよくよすることはない。四、五日静かに養生すれば、よくなるよ」

くよくよせずに、静かに養生せよ！　養生して肥ったら、彼らは当然それだけ多く食えるのだ。だがわたしには何のよいことがあるのだ、何が「よくなる」というのだ？　彼ら一味の者は、人間を食おうと思いながら、一方ではおずおずして、かくしだてをすることを考え、さっさと手を下そうとはしない。まったく笑止千万だ。わたしはこらえきれなくなり、大声で笑いだした。じつにいい気持だ。自分でもわかったが、その笑い声の中には、勇気と正義がこもっていた。老人も兄も色を失った。わたしのその勇気と正義に圧倒されてしまったのである。

だが、わたしに勇気があればあるほど、彼らはわたしを

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

食いたがるのだ。その勇気にあやかろうとしてである。老人は戸口を出ると、少し行ってから、声をひそめて兄にいった。「急いで食べなさいよ」兄はうなずいた。あんたもそうだったのか！　この大発見は、意外のようであって、じつはそうではない。わたしを食おうとしてぐるになっているのは、わたしの兄なのだ！

人食いはわたしの兄なのだ！

わたしは人食い人間の弟なのだ！

わたし自身が人に食われてしまっても、それでもやはりわたしは人食い人間の弟なのだ！

5

この二、三日、一歩退いて考えてみた。たとえあの老人が首斬り役人の変装ではなくて、ほんとうに医者だとしても、やはり人食い人間ではある。彼らの祖師の李時珍が書いた『本草なんとか』には、人肉は煮て食うことができると、はっきりと書いてあるのだ。彼はそれでも、自分は人を食わないということができるか？

わが家の兄にいたっては、言い逃れをする余地はない。彼はわたしに書物の講義をしてくれていたとき「子を易えて食らう」（『左伝』哀公八年に「楚人、宋を囲む。子を易えて食らい、骸を析きて爨く」とある）こともゆるされる、と自分の口からいったことがある。また、たまたまある悪人について議論をしたとき、彼は殺すべきだといっただけではなく、「肉を食らい皮に寝ぬ」（『左伝』襄公二十一年に「二子は、禽獣に嘗うれば、臣、その肉を食らいて、その皮に寝処せるなり」とある）べきだとさえいった。わたしはそのときまだ小さかったので、胸が長いあいだどきどきしたものだ。一昨日、狼子村の小作人が来て心臓や肝臓を食うことを話したが、彼はそのときも少しも不思議がらず、しきりにうなずいていた。これによっても、心が以前と同じように凶悪なことがわかる。「子を易えて食らう」ことがゆるされる以上、何でも易えることができ、誰でも食らうことができるのだ。わたしは以前は彼が道理を説くのをただきいていただけで、あいまいにすごしてきたが、いまはわかった。彼が道理を説いていたとき、口のまわりには人間の油がついていただけではなく、心の中は人間を食いたいという思いでいっぱいだったのだということが。

6

真っ暗で、昼なのか夜なのかわからない。趙家の犬がまた吠えだした。

獅子のような凶悪な心、兎の卑怯、狐の狡猾……

7

わたしは彼らのやり方がわかった。すぐに殺してしまうことは、やりたくないのだ。またやれもしないのだ。たたりがこわいからだ。だから彼らはみんなで連絡をとり、網を張りめぐらして、わたしを自殺に追い込もうとしているのだ。数日前の町の男女の様子や、このごろの兄の行動を見れば、八、九分通りそうだということがわかる。いちばんいいのは、腰帯をほどいて梁にかけ、自分で首をつって死ぬことだ。彼らは殺人の罪名を受けず、しかも念願がかなうのだから、当然みなおどりあがってよろこび、嗚咽するような笑い声をあげるだろう。首をつって死なければ、おびえ憂えて死ぬことだ。少しは痩せはするが、やはり満足するだろう。

彼らは死肉しか食えやしないのだ！――何かの本に書いてあったのを覚えているが、「ハイエナ」という動物がいて、眼つきも姿も醜悪で、いつも死肉を食い、どんな大きな骨でもこなごなに嚙みくだいて、腹へ呑み込んでしまうという。思っただけでもおそろしくなる。「ハイエナ」は狼の親類であり、狼は犬の本家だ。一昨日、趙家の犬がわたしをじろじろ見たが、やつも一味であり、早くから連絡があったとみえる。老人は下ばかり見ていたが、なんでわたしがだまされたりするものか。

いちばん哀れなのはわたしの兄だ。彼も人間なのに、どうして少しもこわがらないのだろう。しかもわたしを食おうとしてぐるになっているとは。ずっと習慣になっているので、わるいとは思わないのだろうか。それとも良心を失ってしまって、知っていながらやるのだろうか。

わたしは人を食う人間を呪うことを、まず兄からはじめよう。人を食う人間を改心させることも、まず兄からにしよう。

8

じつはこんな道理は、いまでは、彼らにもとっくにわかっていなければならないはずなのだが……

突然、一人の男がやってきた。年はせいぜい二十歳前後で、顔かたちははっきりとは見えないが、にこにこ笑いながら、わたしに向かってうなずいた。彼の笑いもほんとうの笑いではないようである。わたしは彼にたずねた。「人を食うことは、正しいことかね」彼はやはり笑いながら「飢饉でもないのに、人を食ったりなどするものか」といった。わたしはすぐさとった。彼も一味で、人を食うのが好きなのだと。そこで勇気百倍して、あくまでもたずねた。「正しいことかね」

「そんなことをきいてどうするのだ。君はほんとうに……冗談がうまい。……今日はよい天気だね」
天気はよく、月もあかるい。だが、わたしは君にたずねているのだ。「正しいことかね」と。
彼はそうだとはいわなかった。あいまいに、「いや……」と答えた。
「正しくない？　それなら彼らはなぜ食うのだね」
「ありもしないことを……」
「ありもしないこと？　狼子村では現に食っているし、書物にもみんな書いてある。真っ赤で新鮮だと」
彼は顔色をかえた。鉄のような青い色になった。眼をみはっていった。「あるかもしれん。昔からそうだったから……」
「昔からそうだったのなら、正しいことかね」
「君とその道理を論じたくはないよ。とにかく君はいうべきじゃない。君のいうことはみんなまちがいだ」
わたしは飛び起きて、眼を見開いた。その男の姿はもうなかった。全身、汗まみれだった。彼の年頃は、わたしの兄よりも下だったが、やはり彼も一味だったのだ。きっと親たちが前から教えていたのだろう。もう自分の息子にも教えてしまったかもしれない。だから子供たちまでが、みんなにくにくしげにわたしを見るのだ。

9

自分は人を食おうとしながら、人に食われることをおそれている。だからみんな疑心暗鬼の眼で、お互いにうかがいあうのだ……
そんな考えを捨て去り、安心して仕事をし、道を歩き、飯を食い、眠ったなら、どんなに気楽だろう。これは一つの門、一つの関所にすぎないのだ。彼らはしかし、父子、兄弟、夫婦、朋友、師弟、仇敵から見知らぬ者同士まで、みんな一味になって、互いにはげましあい、互いに牽制しあって、死んでもこの一歩を踏み越えようとはしないのだ。

10

朝早く、兄をたずねていった。彼は表の間の戸口の外に立って、空を眺めていた。わたしは彼のうしろへ行って、戸口に立ちふさがり、格別に気を落ち着けて、格別になごやかに話しかけた。
「兄さん、話したいことがあるのだけど」
「いってごらん」彼は急いでふりむき、うなずいた。
「ちょっとしたことなんだけど、うまくいえないんだ。兄さん、たぶん太古の野蛮人は、みな人を食ったのだろうな。

その後、考えがかわってきて、ある者は人を食わなくなって、あくまでもよくなろうとしたので、人間になった。ほんとうの人間になったんだ。だが、ある者はやはり食っていた。——虫けらだって同じで、あるものは魚や鳥や猿になり、ずっと人間にまでなったのだ。あるものはよくなろうとせず、いまでもやはり虫けらのままだ。人を食う人間は人を食わない人間にくらべて、どんなに恥ずべきだろう。虫けらが猿に恥じるのにくらべて、ずっとずっと恥ずべきだろうね。

易牙（春秋時代の斉の料理人）が自分の息子を蒸して桀紂（桀は夏の暴王、紂は殷の暴王）に食わせたのは、ずっと昔のことだ。ところが、盤古（伝説上の天地の創造者）が天地を開いて以来、ずっと易牙の息子まで食いつづけ、易牙の息子からずっと徐錫林（清末の革命家。巡撫の恩銘を襲撃して殺され、その部下に肝を食われたという）まで食いつづけ、徐錫林からまたずっと狼子村で捕えられた男まで食いつづけてきたのだ。去年、城内で囚人が殺されたときも、やはり肺病やみの男が饅頭にその血をぬってなめたのだ。

彼らはわたしを食おうとしているのだ。兄さん一人では、どうするわけにもいかないだろう。しかし、仲間にはいらなくたっていいじゃないか。人を食う人間は、どんなことだってやる。彼らはわたしを食うのだから、兄さんをだって食うよ。仲間同士でも、やはり食うよ。ただ一歩だけ向きをかえれば、いますぐ改めさえすれば、みんな太平になるのだ。昔からそうだったにしても、わたしたちは今日からでも格別によくなろうとして、それはいけない！　といえばいいのだ。兄さん、わたしは兄さんはそういえると信じている。先日小作人が年貢をまけてくれといったとき、兄さんはいけないといったんだから」

はじめ、彼はただ冷笑しているだけだったが、次第に眼つきが凶悪になりだし、彼らの内情をあばいたとたん、顔が真っ青になってしまった。表門の外に一味の者が立っていた。趙貴翁と彼の犬もその中にいて、みんなおそるおそるはいってきた。ある者は顔がよく見えない。布でおおっているようだった。ある者はいつものように青い顔をして歯をむきだし、にやにやと笑っている。わたしは見覚えがある。彼らは一味で、みんな人を食う人間なのだ。しかしまたわかっているのだ。彼らの考えはまちまちで、ある者は昔からそうだったのだから食うべきだと思い、ある者は食うべきではないと知りながら、しかもやはり食おうとしているのだが、他人にそれをいわれることをおそれていて、それゆえわたしのいったことをきいて、腹が立ってならないのに、口をつぐんでせせら笑っているのである。

そのとき、兄が突然、こわい顔をして、大声でどなった。

「みんな出ていけ！　気違いが、なにがおもしろいのか！」

そのとき、わたしはまた一つ彼らの巧妙さをさとった。

彼らは改めようとしないばかりか、ちゃんと仕組んでいたのである。気違いという名目を用意していて、わたしにおっかぶせたのだ。そうすれば将来食ってしまっても、太平無事であるばかりか、同情してくれる者さえあるだろう。小作人が一人の悪人をみんなで食ったといったのは、まさにこのやり方である。これが彼らの常套手段なのだ。

陳老五もぷんぷんしながらやってきた。だがどうしてわたしの口をふさぐことができよう。わたしはあくまでも彼ら一味の者にいってやらねばならぬ。

「おまえたち、改めるがよい。心の底から改めよ。やがては人を食う人間は容れられなくなり、この世に生きてゆけなくなるということを知れ。

おまえたちがもし改めなければ、自分も食いつくされてしまうのだ。たとえ生きのびたところで、ほんとうの人間にほろぼされてしまうのだ。猟師が猿をうちつくすように！——虫けらと同じように！」

その一味の者らは、みんな陳老五に追いはらわれてしまった。兄もどこかへ行ってしまった。陳老五はわたしに部屋へもどるようにすすめた。部屋の中は真っ暗だった。梁や椽が頭の上でふるえだした。しばらくふるえているうちに、大きくゆれだし、わたしの体の上にのしかかってきた。とても重く、身動きもできない。やつはわたしを殺そうとしているのだ。わたしはその重たさがにせものだとわかったので、もがいて抜け出したが、全身、汗まみれになった。だがわたしはあくまでいってやらねばならぬ。

「おまえたち、すぐ改めよ。心の底から改めよ。おまえたちは、やがて人を食う人間は容れられなくなるということを知れ……」

11

日ものぼらず、戸もあかず、毎日二度の食事。

わたしは箸をつまんで、兄のことを思い出した。妹が死んだわけも、みな彼のせいであることに気がついた。あのとき妹は五歳になったばかりで、かわいくいじらしい様子は、いまも眼の前にうかぶ。母が泣きつづけていると、兄が母に泣くなといった。自分が食ったものだから、泣かれるといくらか気がとがめるからだったろう。もしまだ気がとがめるなら……

妹は兄に食われてしまったのだ。母は知っていたのだろうか。わたしにはわからない。

母も知っていたのだろう。だが泣いたときには、何もいわなかった。たぶんあたりまえのことだと思っていたのだろう。わたしが四、五歳のころだったと思うが、表の間の前に坐って涼んでいたとき、兄はこういった。父母が病気になったら、子たる者は肉を一切れ切りさいて、よく煮て

食べてもらってこそ、立派な人間といえるのだと。母もそれをいけないとはいわなかった。一切れが食えるなら、まるごとだって当然食えるはずだ。だがあの日の泣き方は、いま思い出しても、ほんとうに胸が痛くなる。これはまことに奇妙でならぬことだ！

12

考えられなくなってしまった。

四千年来、いつも人を食ってきたところ、今日やっとわかったのだが、わたしもそこで長いあいだすごしてきたのだ。兄が家事をきりもりしていた、ちょうどそのとき妹は死んだのだった。彼が飯や料理の中にまぜて、こっそりわたしたちに食わせなかったとはいえない。

わたしは知らぬまに、妹の肉の幾切れかを食わなかったとはいえないのだ。いまは順番が自分にまわってきて……

四千年の食人の履歴をもっているわたし。はじめはわからなかったが、いまはっきりとわかった。ほんとうの人間にはめったに会えないということが！

13

人を食ったことのない子供なら、まだいるかもしれないではないか！

子供を救え……

（一九一八年四月）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook